

備されました。

本書の著者、山田秀次郎氏は防大5期、空自に入隊後、大阪大学で工学博士号を取得し、その後一貫して空幕、技術研究本部（技術）、調達実施本部等で戦闘機の研究開発に従事され、退官後も（社）日本航空宇宙工業会の役員としてわが国の航空宇宙分野の発展に尽力された方です。

新たに戦闘機を開発・配備するということは、日本の防衛そのものに大きな影響を及ぼす巨大プロジェクトです。当然、自衛隊だけでなく、経済産業省、外務省、大蔵省（当時）等の行政当局との調整や国会対応、そして米国との折衝なども必要になってきます。

FSXの開発プロセスですが、まず空幕で要求性能が策定されました。その要求性能に対して国産開発が可能なのかどうか、その検討が空幕長から技術に依頼されます。この時、著者は技本航空開発官付第三開発室長という立場にあり、85年9月に「エンジンを除いて開発は可能である」という回答を書き上げています。

その後、日米経済摩擦の激化や東



## 寄贈図書を紹介

佐藤 正 陸自78

山田秀次郎（空自61）著

『コントレイル—FSXとは何だったのか—』（幻冬舎）

FSXとは、Fighter Support-Xの略で、次期支援戦闘機のことです。

F-1の耐用年数が問題となっていた1980年代前半、次期支援戦闘機については国内開発の期待もありましたが、政治的な背景からF-16をベースとした日米共同開発に決着しました。1988年にF-2として開発を開始、1995年に試作機が完成し、2000年から部隊に配

芝のココム事案等を含む諸事情により、国産開発のオプシオンは消え、日米共同開発へと政治決着が図られます。著者はこの頃の様子を空幕技術第一課長という立場で観察していました。

次に著者はF S X開発室長に就任、再びF S Xの実務に関わることとなります。F S X開発のポイント

の一つとも言うべき「飛行制御用ソフトウェア」の扱いを巡り、米国との折衝が必要になりワシントンに向きます。このソフトウェアの開発は、日本が自ら行うべきであるというのが著者の強い信念であり、もしこの折衝が上手くいかなければ、著者は辞職を考えていました。日本側の強い決意は米国側に伝わり、ソフトウェアの開発は日本が取り扱うことと決着しました。

F S X全体としては、この他にも、エンジン選定や素材の技術移転などに関して課題がありました。1990年3月に日米間で合意がなされ、開発へと動き出しました。

本書の主要なテーマF S Xとは何だったのかについては、まさに著者にしか書けないテーマであることが、著者とF S Xとの関わりから

明らかです。

しかし、著者がこの本で語っているのは、単にF S Xを巡る体験談や交渉の話ではありません。もともと根源的な問題、つまりF S Xの交渉を通じて著者自身が考え、学び、確信したことを、技術幹部の後輩や防衛産業に従事する技術者たちに伝えたいという強い思いです。

要求性能の策定のあり方、運用部門と技術部門との協調、技術を育てる平素からの活動の重要性、技術幹部とは何か、科学と技術の関係などについて、著者の考えが随所に展開されていきます。

題名の「コントレイル」とは、飛行機雲のことです。飛行機の航跡に沿ってできる白い線形の雲は、やがて空の青さの中に消えていきます。著者自身の技術幹部としての半生をコントレイルという言葉に託したのだと思いますが、同時に防衛装備の研究開発と製造に関わる技術幹部や企業人に対して、一人の技術者として、新たなコントレイルを描いてほしいとの強い思いがあったのかも知れません。

F S Xというメインテーマの他に、本書には、著者が幼少の頃に経

験した戦災の記憶や防大山西岳部時代の鹿島槍へのアタックについての文章、防大山岳会として新疆ウイグルの山岳地帯のトレッキングに参加したときの紀行文などが、技術者らしい正確な文体で綴られています。

最終章では、実際に著者が投函したという「防大校長への手紙」も収められています。技術者であると同時に高邁で誇り高き自衛官でもあった著者の一面を知ることができま

す。著者は、偕行社の「偕行アートクラブ」の会員でもあります。本書に著者自身が描いた数枚の絵画が挿入されていますが、そのプロ級の腕前には全く脱帽します。

本書は、電子書籍として出版されています。購入はアマゾン、楽天、ソニー、紀伊国屋などの電子書店で可能です。また、アマゾンではペーパーバックとして通常の印刷本で購入できます。

偕行社の編集委員会の書庫にも保管していますので、ご興味のある方は偕行社編集委員会にご連絡ください。